

## 第1部

### 日本のろうあ者スポーツの歴史（概説）

1918年（大正7年）7月7日

日本聾啞協会東京部会の東京野球大会が開かれる。（小石川・官立東京聾啞学校）

1926年（大正15年）11月

社団法人日本ろうあ協会が第1回ろうあ者体育競技大会の開催。この大会は文部省・ろう学校・各ろうあ団体の協力を得て、戦時統制まで続けられた。

1938年（昭和13年）5月

全国ろうあ者陸上競技大会を開催（京都）

1940年（昭和15年）10月20日

官立東京聾啞学校で野球大会（大会名不詳）が開かれる。東京市立聾啞学校同窓会野球部「柏葉会」などが参加。

1941年（昭和16年）7月

文部省次官通牒により、全国的規模のスポーツ大会の中止命令が出される。

1943年（昭和18年）

文部省の戦時学徒体育訓練実施要項により、野球は「敵性スポーツ」として追放。これにより、ろうあ団体も野球部を解散させられた。

1944年（昭和19年）

太平洋戦争が激化し、「本土決戦」が叫ばれる中で、福祉活動はもちろんスポーツ活動も停止された。この状態は1945年の敗戦まで続いた。

1947年（昭和22年）

全日本ろうあ連盟が発足。戦前からのスポーツの伝統を受け継ぎ、全国各地で聴覚障害者のスポーツ活動が復活し始めた。

1948年（昭和23年）5月30日

第1回近畿聾啞対抗優勝野球大会を、大阪市立聾学校で開催。

1948年（昭和23年）8月15日～16日

第1回関東聾啞軟式野球大会を、東京聾啞学校で開催

1953年（昭和28年）11月

第1回関東ろう学校陸上競技大会を開催

1955年（昭和30年）9月24日

第1回全国聾啞優勝野球大会を京都で開催。同大会は、1968年（昭和42年）に全国ろうあ者体育大会に吸収され、軟式野球競技として続いている。

1962年（昭和37年）

第12回全国ろうあ者大会（福岡県で開催）において、「国際ろうあ者オリンピックに参加しよう」との決議を採択。

1963年（昭和38年）3月

C I S Sへの加盟をめざし、独立したろうあ者スポーツ組織の設立への機運が高まり、日本ろうあ体育協会が創立された。直ちにC I S Sへ加盟が申請された。

1964年（昭和39年）1月

日本ろうあ体育協会は、C I S Sより加盟を承認された。

1964年（昭和39年）2月15～16日

第1回全国ろうあ卓球・体操選手権大会を開催。ろう学校生徒も含め149名の選手が参加。

1964年（昭和39年）9月17日

東京オリンピックの国内聖火リレー走者に、福岡県立直方ろう学校の岩口政道さんと福永敬子さん、大阪市立ろう学校の土崎ふみえさんが選ばれた。

1965年（昭和40年）6月27日～7月3日

第10回国際ろう者競技大会（アメリカ・ワシントン）に日本が初参加。選手7名・役員4名の選手団。28カ国約890名の選手が参加。日本選手は陸上・水泳・卓球に出場。男子マラソンで銅メダル、女子卓球で銀メダルを獲得。

1967年

第6回世界ろう者冬季競技大会（西ドイツ、12カ国参加）に日本が初参加。日本は入賞なし。

1967年（昭和42年）10月23日～24日

第1回全国ろうあ者体育大会が東京の神宮外苑野球場、新宿区体育館などで開催され、約500名の選手・役員が参加した。

1967年（昭和42年）6月17日

高体連、「ろう学校に資格なし」として、東京教育大学付属ろう学校高等部の遠藤宗志選手の関東高等学校陸上競技選手権大会出場資格を取り消す。

1968年（昭和43年）2月5日～6日

第1回全国ろうあ者冬季体育大会が、群馬県の武尊オリンピックアスキー場で開催された。滑降・回転・大回転の3競技がおこなわれ、16団体から選手110名が参加した。

1971年（昭和46年）4月1日

日本陸上競技連盟の第3種公式審判員に、ろう者で初めて足立幸男さんと江崎功一さんが登録された。

1981年（昭和56年）8月1日

沖縄県立北城ろう学校が「ろう学校であること」を理由に日本高校野球連盟への加盟を拒否されている問題を、「日本聴力障害新聞」がスクープ報道。国内に大きな反響を巻き起こす。

1982年（昭和57年）4月24日

日本高校野球連盟、沖縄県立北城ろう学校の加盟を正式決定。

1982年（昭和57年）10月16日～17日

18回目を迎えた全国身体障害者スポーツ大会（島根県）で、聴覚障害者バレーボール競技が初めて登場。

1986年（昭和61年）10月27日～11月1日

JALトロフィー第2回アジア太平洋ろう者サッカー選手権大会を日本（京都府）で開催。オーストラリア、マレーシア、香港、韓国、日本の5カ国が参加。韓国が優勝。

1998年2月

長野で開催された第18回冬季オリンピックで、聴覚障害者の高橋竜二さん（北海道）がジャンプ競技のテスト・ジャンパーという大役を担った。

1998年7月

アメリカのろう者野球チームを招待し、日米ろう者親善野球大会を日本で開催。

1999年2月

スイス・ダボスで開催された第14回世界ろう者冬季競技大会のアルペン競技女子回転で銀メダル、大回転で銅メダルを獲得。冬季大会での日本のメダル獲得は史上初めて。

1999年（平成11年）6月

財団法人全日本ろうあ連盟体育部を廃止し、日本ろうあ体育協会を「日本ろう者スポーツ協会」に改称して、全日本ろうあ連盟に組み入れ。

2000年（平成12年）7月

日米ろう者硬式野球大会（アメリカ、ワシントンDCで開催）に日本代表チームを派遣。

2005年（平成17年）

日本のプロ野球ドラフト会議で、聴覚障害者が史上初めて指名された。石井裕也投手（三菱重工横浜）で、中日ドラゴンズに6位指名され、翌2006年、プロ1軍デビューを果たした。

## 第2部

### ろうあ者のスポーツ権獲得への闘い

#### 1、過去における差別の実例

##### （1）ろう学生の地区大会出場権を剥奪

1967年5月、千葉県高等学校陸上競技大会で、東京教育大学（当時、現筑波大学）附属ろう学校高等部3年生の遠藤宗志君（18歳）が、男子100M決勝11秒4、200M決勝22秒6の好タイムで2種目に優勝した。

この大会の各種目の上位入賞者は、上部レベルの関東地区高等学校陸上競技選手権大会への出場権を与えられることになっていた。遠藤君は、関東大会に出場できるものと信じて疑わなかったが、全国高等学校体育連盟は6月17日、遠藤君の関東地区高等学校陸上競技選手権大会への出場資格を取り消す決定をした。

資格取り消しの理由は、遠藤君が普通の高校でなく「ろう学校」の生徒であることであった。

ろう学校生徒の参加を認めない具体的な理由について、全国高等学校体育連盟は「ろう生徒は耳が聞こえない。聞こえないと危険が伴う。コール（選手の招集）など大会運営上も支障をきたす」と説明した。

## （２）ろう学校であること理由に地区大会出場権認めず

1974年7月、全国高等学校軟式野球大会福井県予選大会の決勝戦で、福井県立ろう学校が県立武生高校池田分校を破り、初優勝を飾った。

福井ろう学校ナインは「次は北陸地区大会出場だ！」と躍り上がって喜んだが、試合の直後に福井ろう学校の監督が福井県高等学校野球連盟の役員に呼び出され、「ろう学校は北陸大会に出場できない」と宣告された。

上部クラスの北陸地区大会への出場権について、福井県高等学校野球連盟は県大会優勝校である福井県立ろう学校を県代表と認めず、準優勝の高校を県代表として認め、北陸地区大会の出場権を与えた。

理由は、連盟の規定により、普通の高校であれば出場権が与えられるが、ろう学校には認められないというものであった。

このことを知った父兄や関係者から批判の声があがり、全日本ろうあ連盟や日本ろうあ体育協会は、日本高等学校野球連盟に抗議した。

全国から抗議の電話や手紙が殺到し、日本高等学校野球連盟はついに、福井ろう学校を北陸地区第二代表と認め、8月に大阪・藤井寺球場で開催された全国高等学校軟式野球大会への特別出場を認めた。

## （３）日本高等学校野球連盟によるろう学校差別

1978年に設置された沖縄県立北城ろう学校は、1964年から65年にかけて風疹児童が大量に出生したことに対応して特設された中学・高校6年間限りの学校であった。

児童たちが高校生になった1981年4月、野球部が結成された。部員16人・全員1年生のチームである。張り切って、全国の高校球児の夢舞台である「甲子園」を目指すことになった。

ところが、日本高等学校野球連盟から、ろう学校であることを理由に加盟を拒否された。その根拠になっているのは、「日本学生野球憲章」という規定であることが分かった。

日本学生野球憲章 第3章

高等学校野球 第16条

「それぞれの都道府県の高等学校野球連盟に加入することのできる学校は、学校教育法第4章に定めるものに限る」

ろう学校は学校教育法第6章に規定されていて、第4章に定められた学校ではないから、加盟できないと言うものである。

たまたま沖縄に取材に来ていた「日本聴力障害新聞」記者がこの問題を取り上げ、スクープ記事を発表。記事は世論の大きな反響を呼び起こした。全国の国民から抗議の電話やFAXが日本高校野球連盟に殺到した。

そのあと、連盟は、ついに北城ろう学校の加盟を承認した。

そして今、当時のドキュメントに感動した横浜市の難聴の少年が成長して、「ろう者のプロ野球選手」第1号（中日ドラゴンズ・石井裕也、背番号30＝入団当時）となり、活躍している。ろう児童に「耳が聞こえないと危険だから」と野球をさせようとしなかった措置が、明らかに誤りだったことが証明されたのである。

（執筆＝松島謙司・全日本ろうあ連盟スポーツ委員会啓発普及部委員）

#### 【参考文献】

『財団法人全日本ろうあ連盟50年のあゆみ』（全日本ろうあ連盟発行）

『ろう者野球50年』（日本ろうあ体育協会発行）